

研究課題名	橈骨遠位端骨折術後早期運動中に月状骨窩骨片が再転位した症例の検討
実施責任者	所属・職名： リハビリテーション部 作業療法士
	氏名： 西村 勇輝
研究の概要	<p>橈骨遠位端骨折の治療では、2000年の掌側ロックングプレートの開発に伴い、その固定性の良さから早期に可動域を回復することが可能となりました。当院でも、術後早期から可動域訓練を開始し、良好な成績を獲得しています。しかしながら、掌側ロックングプレート固定後の骨折の再転位は、少数ではあるものの依然として発生しています。なかでも、橈骨月状骨窩骨片（Volar lunate facet fragment；以下 VLF 骨片）の再転位についての報告が散見されています。本研究の目的は、当院で掌側ロックングプレート固定術後に早期可動域訓練を行なったなかで VLF 骨片が再転位を生じた症例を調査し、その発生要因について検討することです。</p>
対象となる個人情報	年齢、性別、治療期間、手関節・前腕の関節可動域、握力
実施の期間	西暦 2014 年 1 月 1 日より

西暦 2019 年 7 月 31 日まで

研究対象

当院にて橈骨遠位端骨折に対し手術治療およびリハビリテーションを行った患者が対象となります。